

# 『操觚字訣』の性格と字義弁別の方法

近 藤 尚 子

## はじめに

本稿は『操觚字訣』の文字書としての性格を考え、その註文を検討して字義弁別の方法を明らかにすることを目的とする。

『操觚字訣』は伊藤東涯の作とされているが、東涯の実子東所の補になるものである<sup>(1)</sup>。長い間写本のみが伝わり、明治時代に入っではじめて、村山徳淳の校をへて刊行された。本稿の考察はこの明治刊本によって行なうが<sup>(2)</sup>、『操觚字訣』の成立過程、写本との関係などの問題にはいっさい言及しない。それは本考察が『操觚字訣』の本文をよむことを目的としているからである。

—

①(3)同訓ノ文字、ヨク／＼吟味セザレハ、用ヒ誤ルコアリ、華人モコノ失アリトミヘタリ、孫月峰カ書ニ、今之諸生ハ、字義ニウトキ故、文字アヤマリ用ユルコ多シトイヘリ、況ヤ國人ヨク／＼吟味セズンハアルベカラス、(字例 四才)

②正用ハタマソノ時代ノ號ヲ用ヒ、明清ト稱スルガ當リナリ、  
臨レ文ノ間、混用スルコナカレ(卷九 十二才)  
③臨レ文命レ室ノ間、各ソノ義ヲ考テ用ユベシ、相混用スルコナ  
カレ(卷九 四一ウ)

①にみられるとおり『操觚字訣』の目的は同訓の文字の誤用をさけるために字義を吟味することである。また②③から誤用をさけなければならないのは「臨レ文ノ間」であることがわかる。この場合の「文」とは漢文、さらにいえば中国語<sup>(4)</sup>の文法にのった文章である。『操觚字訣』が「臨レ文」に場を限定するならばその「字訣」の対象となるのは漢文をつづるための文字、中国語を表記するための文字であって、日本語を表記するための漢字とは区別しなければならない。筆者は仮にこれを「シナ文字」とよぶ。シナ文字は中国語を表記するためのものであるから、よりどころは中国にもとめられる。

考據スル所ノ字書ハ、字彙正字通、字典、品字鑑ヲ多シト

ス、ソノ字注、一々出處ヲ録スルニ暇アラス、若譯ノ精到ナ  
ラサルモノアラハ、各本書ニ就テ考ヘシルベシ（凡例 二  
オ）

本文をみると、「字典云、今經史於戲於摩鳴摩鳴於乎相通、  
皆歎辭ト」（卷二 二ウ）、「正字通ニ、與、曰音別、義同、凡經史  
曰通作」云（卷二 六オ）などのように典拠を明らかにして字注  
を引くこともあり、「如ハ從隨ナリ、一曰若ナリ、同ナリト注ス」  
（卷二 十七ウ）のように単に「注ス」とするものもある。どち  
らの形をとるにしても、中国の字書類に「考據スル」と明言して  
いることは注目すべきであらう。このように『操觚字訣』が  
シナ文字を対象とし、字義弁別のよりどころを中国に求めている  
と考えるとき、この書は翻訳辞書として扱うべきである。つまり  
シナ文字の字義をどのように把握し記述しているか、を考えてい  
かなければならない。

## 二

『操觚字訣』の本文は卷一をのぞいて、原則として「見出し  
字」、「用例」、「註文」という三つの部分からなる。中村幸彦氏は  
『操觚字訣』なるこの本の中心は、説明の部分になくして、  
用例の部分なのであった（6）。

としている。しかしこの評価は説明の部分、つまり「註文」に  
対して不当ではないだろうか。むしろ「用例」と「註文」とはお

なじレベルのもので互いに補いあっていると考えたい。言語の習  
得には帰納的方法と演繹的方法とのふたつの道すじがあって、こ  
のふたつが組みあわされて言語は習得される。個々から体系を把  
握するのが帰納法、体系から個々を把握するのが演繹法とするな  
らばわれわれが白紙の状態から母国語を習得するのは帰納法によ  
るのであり、わからないことを辞書で調べるのは演繹法である  
と考えられる。外国語を学習する場合には、とりわけ演繹法は有  
効である。ところで『操觚字訣』において「用例」は帰納的理解  
のためのもの、「註文」は演繹的理解のためのものといえることが  
できる。

④凡實字ハ、字注ヲ委シク考フレハ、ソノ別自ラアキラカナ  
リ、古文ノ作例ニヨリテ分ツヲマタズ（卷九 一オ）

⑤四字片、ツキニトイフニ用ユルトキコノ辨ニテ分ツベシ

（卷三 七ウ）

⑥中庸九經ノ章ニ、尊賢云々、朱注ニ、不惑、謂レ不疑ニ於  
理、不眩、謂レ不迷ニ於事トアリ、上ノ辨ニテミルベシ、  
（卷五 二六ウ）

⑤⑥で「コノ辨」「上ノ辨」とあるのはその条の註文をさして  
いるのである。また④は卷九・卷十「實字」編についての説明で  
ある。「實字」編は卷二から卷八までとこととなり、「用例」を特別  
にまとめてあげることをしていない。その理由を述べている部分で  
あるが、「實字」については古文の作例によって「分ツ」必要がな  
いとしているのである。④⑤⑥をあわせ考えると「用例」の部分

は「註文」を確認するためにあるといえよう。もちろん『操觚字訣』の成立に際しては用例からの帰納は重要な作業であっただろう。しかし『操觚字訣』にとって「註文」は決して軽んじられないものである。

### 三

以下、『操觚字訣』の字義弁別の方法を分析していく。例としてまず巻七「雑字」編の「尊尚貴崇上」の註文をとりあげる。これは任意の例である。

#### 尊尚貴崇上

(例文省略)

尊<sup>①</sup>ハ、高稱也、重也、貴也、君父之稱也、又敬也、尊卑ト反對ス、俗ニタフトヒトイフ通り、目上ヘアリガタフ、大事ニカケ、アガマヘオモンズル<sup>②</sup>也、タフト<sup>④</sup>ブ、タフトシ<sup>⑤</sup>ルニ用ユ、貴ハ、貴賤ト反對ス、又高也、尊也、人物ノ上品、直ヒノ高キ類ナリ、尊者トイヘバ<sup>⑥</sup>齒德アルタフトキ人也、貴者トイヘバ、歴々ノヨキ衆也、貴モタフトギ、タフトブ<sup>⑦</sup>ルニ用ユ、貴<sup>⑧</sup>德尊<sup>⑨</sup>士トイヘバ、德ヲ上品トシ、士ヲアガマエルト云<sup>⑩</sup>也、崇ハ、重也、高貴也<sup>⑪</sup>タカシトヨム字也、タフトブトヨム<sup>⑫</sup>片ハ、仰キシタヒ、オモンズル<sup>⑬</sup>也、上ハ、崇也、尊也、カミトヨム字ナリタフトブトヨム<sup>⑭</sup>片ヤハリカミトスルト云<sup>⑮</sup>也上ヘアゲル、上座ニオク、ミナタフトブ也、ヤハリソノ意也、尚ハ、音上<sup>⑯</sup>、崇也<sup>⑰</sup>、貴也、ト注ス、上ノ字ト音義同

ジ<sup>①</sup>也、加也<sup>②</sup>、飾也、ト注ノ、クヲフルトモヨム字ナレバ、上ヘノセル義モアリ、(巻七 二四ウ)  
この註文を整理すると字義弁別のためのいくつかの着眼点が明らかになる。

まず①「高稱也、重也、貴也、君父之稱也、又敬也」は中国の字書からの字注である。中国の字書からの字注は、ここでは出典は示されていないが、⑥⑪⑬⑮⑯もこれにあたる。なお⑮は音注である。

つぎに②「尊卑ト反對ス」として「尊」の反対の義をもつ「卑」をあげる。⑤「貴賤ト反對ス」も同様である。

③「俗ニタフトヒトイフ通り、目上ヘアリガタフ、大事ニカケ、アガマヘオモンズル<sup>②</sup>也」では、「タフトヒ」という「よみ」としての日本語を示すことによって、「尊」字の字義にせまろうとする。このように「よみ」を示している部分は⑫⑭⑯である。「タフトブ」を軸にして「崇」については「タカシ」(⑫)、「上」については「カミ」(⑭)、「尚」については「クヲフル」(⑯)と、一字に対して複数の「よみ」をあげている。これは中国語と日本語との語彙体系のずれを利用して、シナ文字の字義を明らかにしているのである。

④「タフトブタフトシ<sup>⑤</sup>ルニ用ユ」は用法の説明である。「尊」字は動詞としても形容詞としても用いられるというのである。「貴」についての記述⑨も同様である。

⑧は「尊者」、「貴者」という熟語の語義を考えることによって

「尊」と「貴」とのことなりを明らかにしようとする。⑩の「貴徳」「尊士」は用例中にみえる語であるが、おなじように考えられる。

以上の「尊尚貴崇上」の註文を分類整理して左表を得る。

尊字注①	対義②	用法④	熟語⑧⑩	よみ③
貴字注⑥	対義⑤	用法⑨	熟語⑧⑩	
崇字注⑪				よみ⑫
上字注⑬				よみ⑭
尚字注⑮⑯				よみ⑰ 音注⑱

右はごく単純化した表であるが、ここから『操觚字訣』の字義弁別の着眼点のいくつかが明らかになる。すなわち、「字注・音注・対義・用法・熟語・よみ」がそれである。

#### 四

『操觚字訣』は「字例」において字義弁別の方法を論じているのでまずこの「字例」を考えてみる。「字例」の全文を掲載することはできないので、「字例」のあげる字義弁別のための着眼点をまとめて以下に示す。

1 虚字としての意を知る（「語辞」の場合）

2 正仮の別

3 反対・連用・虚実

4 主客の弁

- 5 軽重の弁
- 6 緩急の弁
- 7 先後の弁
- 8 広狭の弁
- 9 大小の弁
- 10 深淺の弁
- 11 強弱の弁
- 12 時ニアタリティフト兼テヨリイフトの弁
- 13 正用散用・古今の弁・大小の弁・貴賤
- 13 はとくに實字に関する条である。一条中に複数あげられている場合はまとめて示した。

「字例」は『操觚字訣』の「字訣」論ともいえるべきものであり、よく整理されている。しかし「字例」の着眼点をもとに本文の「註文」をみていくと重複や不足があり、「字訣」論としての「字例」が実践としての「註文」から遊離している面があることも否定できない。それについては後にふれる。

さて右にあげた「字例」の1～13の着眼点を参考にし、「尊尚貴崇上」の註文について行なったように巻二から巻十までの註文を検討すると、字義弁別の方法は左のように大きく三つに分類される。

Ⓐ その文字自身について考える

Ⓑ 他の文字との関係を知る

Ⓒ 日本語との関係を考える

〔A〕はその文字が生じる契機となった現象とのかかわりを考えることである。具体的にいえばシナ文字の形・音・義について考えることである。これはすべての字義弁別の基本となる。ただし『操觚字訣』において音は字義弁別の手がかりとしてはあまり利用されない<sup>①</sup>。〔B〕はその文字が中国語の語彙体系のなかで占める位置を考えることである。〔A〕〔B〕は中国語内部での文字の考察という点でまとめることができる。また〔C〕は具体的にいえば「よみ」を知ることである。〔A〕〔B〕〔C〕はさらにこまかく分類される。つぎに〔A〕〔B〕〔C〕について考察する。

## 五

〔A〕その文字自身について考える

『操觚字訣』においてはa字形とb義とにわけられる。

〔A〕a字形

訓。ハ、(中略) 窃ニ按スルニ、字言ニ従、川ニ従フ、言バノ流通ノト、コフラズ、オシツケヌヤウニイヒホドキ、ヲシユル<sup>②</sup>也、(巻四 十三オ)

移ハ、(中略) モト禾ニ従フ、苗ヲウヘカヘル<sup>③</sup>也、徒ヲ遼ニ作り、遼ハ疋ニ従ヒ、移ハ禾ニ従フ也、(巻六 二二オ)

減ハ(中略) 字水火ニ従フ、相減息スル義アルベシ、(巻八 二二オ)

「窃ニ按スルニ」(②)、「相減息スル義アルベシ」(③) からこの字形による字義の考察には『操觚字訣』オリジナルのものも含

まれていると考えられる。多少こじつけと思われる部分はあるにしても、文字の形からその文字のもつ義を知ろうとしているのである。

〔A〕b義

これはさらに(1)本義、(2)転義にわけられる。

〔A〕b-1 本義

愈ハ差也、<sup>④</sup>モト勝也賢也トヨム字ユヘ、スグレテヨクナル<sup>⑤</sup>也、(中略) 瘥ハ、モトヤマヒトヨム字也イユトヨムトキハ、差ト音義同ジ、病ノ差除ノキナフニクラブレバ今日ハチトヨキトジリ<sup>⑥</sup>トヨクナルナリ (巻四 五ウ)

植ハ、ウエル義也、木ヲウエソダツルヨリ借用ス (巻七 二四オ)

「愈」が「スグレテヨクナル」であり、「瘥」が「病ノ差除ノキナフニクラブレバ今日ハチトヨキトジリトヨクナル」とであるのは「愈」が「モト勝也賢也トヨム字」であり、「瘥」が「モトヤマヒトヨム字」だからである。つまり字義弁別のための「本義」は④⑤⑥の部分である。「愈」「瘥」「植」についてここで註されている字義はそれぞれ⑤⑥の部分であるが、本義はそれを説明するための部分であって字義とは区別しなければならぬ。なお「字例」では「1虚字としての意を知る」、「2正仮の別」、3のうちの「虚実」がここに含まれる。ただし「字例」のいうように「虚字を語辞として用いる場合」に限らず、ひろく本

義を考えることとしたい。

この「本義」と逆の考え方をするのがつぎの「転義」である。

#### A—b—2 転義

帥ハモトヒキニシテ、シタガフニ転ジ、率ハシタガフガ本

ニテ、ヒキニ転ズ (巻五 十九オ)

別ハ、(中略)分解也分別也弁也ト注ス、転ノ離別送別ノ二

用ニ、引ワカレルコ也 (巻五 四五ウ)

いわゆる「転注」にしても「仮借」にしても、それが用法として定着するとき、そこには新しい義が付加される。文字はこうして概念の範疇をひろげていく。「本義」が近い関係にあるふたつの文字が「転注・仮借」によってそれぞれことなる方向へ発展していくなら、そのことなりのよってふたつの文字を弁別することができる。ここであげた例でいえば③④⑤の部分それぞれである。

また③④⑤は「本義」を考えている部分である。要するに、

字義辞別のための「本義」「転義」とは、問題となっている字義がどちらであるかによるちがいにすぎない。

#### B 他文字との関係を知る

これは1「意味」について考える場合、と2「用法」について考える場合、とにわけられる。

#### B—1 意味

ここでいう「意味」はその文字に与えられた概念にほぼひとしい。したがって「意味」の比較は文字の本義にねざしている。しかし同時に意味体系のどの位置にあるのかを考えることである。

また「意味」は文字に与えられた概念をさすにとどまらず、ある概念に対してひとつの文字を与えるにいたった主体(書き手)の心情をも含むと考える。その意味で「意味」は「用法」に近いともいえる。「意味」はさらに(1)反義・(2)主従・(3)軽重・(4)大小・(5)広狭・(6)時間の六つにわけられる。

#### B—1—(1) 反義

真偽、誠詐、正譌ト反対スルニテ、ソノ趣ヲ弁ズベシ (巻

四 四オ)

間ハ、(中略)間忙ト反対ス、(中略)静ハ、動靜静躁ト反対

ス、(巻七 四ウ)

此ハ彼ニ対スル辞ナリ(中略)是ハ非ニ対スル辞ナリ、(中

略)斯ハ、此ト、チカシ、シカレドモ、彼ニ対セス、(中略)

姦ハ、此ト注ス、コレモ彼ニハ対セス、(巻二 十四ウ)

このほかさきにあげた「尊尚貴崇上」の②⑤もこれにあたる。

「偽・詐・譌」はどれも「イツハル」とよむ。日本語の「イツ

ハル」一語がになっている概念を、中国語ではすくなくとも三つ

に区別する。それを「真・誠・正」という反対の概念をもつ字の

ちがいで区別しようとする(③⑥)。さらに近い字義をもつ「此・

斯・姦」についても「彼」字と対比させて区別するのである(③⑨

④⑫)。

#### B—1—(2) 主従

救ハ助ル方ガオモニナリ、拯ハアゲル方ガヲモニナル也、

(巻四 三二オ)

蓄<sup>⑤</sup>ハ、チツトツ、ヨセアツメテラク<sup>⑥</sup>也モト小サシ、広クナ  
レバ大ニイフ、(巻五 一オ)  
戦<sup>⑦</sup>ハ、(中略)闘<sup>⑧</sup>ノ大ナルモノナリ、闘<sup>⑨</sup>ハ、(中略)戦<sup>⑩</sup>ノ小サ

⑦ **B**  
—  
**1**  
—  
(3)  
輕重

8

バ、能スルヲガ、ナラヌナリ、不ヨリハツヨシ、不能矣トカ

クト、弗能トカクト同ジ意ニナルベシ、畢竟輕重ノ別ナリ、  
古文辭ハ嚴重ナル故、弗ノ字多シ（卷二 二九ウ）

徂<sup>⑤</sup>ハ往也マアユク、ツイユク意アリ、往<sup>⑤</sup>ノカロキモノ也、

(卷五 四十才)

使ハ<sup>⑤</sup>広クテカロシ、令ハ<sup>⑥</sup>セマクテ重シ  
(卷二 二三才)

④⑤⑥⑦が「軽重」にあたる。「軽重」とはおそらくこの「意」——1 意味——に含まれる着眼点のうちでもっとも「意」——2 用法——に近いと考えられる。ひとつの思想にかたちを与えるためにひとつのことば、ひとつの文字をえらぶ。「意」の軽重はそのことばにこめる心情の深さである。「カロシ・オモシ」(④⑥⑦)のほか「ツヨシ・ヨハシ」(⑤)、「フカシ」などを含める。

**B**  
—  
**1**  
—  
**(4)**  
大小

B  
 |  
 1  
 |  
 (5)  
 広狭

堪ハ、(中略)勝ノ字ヨリハヒロシ、(卷三五ウ)

登上ノ二字、アガル<sup>⑥</sup>ヲイフ、ヒロキ字也、コノ外ハミナ、

登上ノ類ノ少シヅ、フリノカハリタルモノ也、(卷七 五

四ウ)

啓ハ、(中略)開ヨリハ意セマクメ、手ギワナリ、(巻八十

ウ

「広狭」は概念そのものの「広さ・狭さ」を比較することである。ここでは<sup>63</sup><sup>64</sup><sup>66</sup>がこれにあたる。また、さきにあげた<sup>55</sup><sup>57</sup>の「広クテ」「セマクテ」もこれに含まれる。たとえば「ヒロク用フ」と用い方の「広狭」で記述する場合もある。これも、概念の大きさにねざすものと考え、この「広狭」に含めておくこととする。

時間

亟ハ、急亟セハ、シキナリ、甚セキイルナリ、數ハ、(中略) ⑤ 亟ヨリハ少シユトリアリ、屢ハ、セツセツ、毎々ナリ、數ヨリハ、又ライアリ、(卷二 二四オ) ⑦ 破ハ急ニ、敗ハ緩シ、(卷八 三六ウ) ⑧ 俱ハ、サシアタリテ、オソル、一(中略) ⑨ 急ニオソル意アリ、(卷五 四九オ)

「緩急」「先後」「長短」などに言及したものを「時間」としてここにまとめる。例文中の⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫がこれにあたる。「字例」でいう「6 緩急の弁・7 先後の弁・12 時ニアタリテイフト兼テヨリイフトの弁」がこれにあたる。ただし本文を検討すると、「字例」の7と12とはほとんど同じものであることがわかる。

#### ㊦ 2 用法

これは他の文字との関係を用法の面から考えるものである。(1) 「文体」による場合と(2) 「熟用」による場合とにわけられる。

#### ㊦ 2-1 文体

『操觚字訣』巻一は「篇法・助字」編で、今回の考察の直接の対象ではないが、「古字今字ノ弁」として古今の別が論じられている(巻一 二二オ)。それによれば古文に用いられる文字が「古字」であり、後世の文に用いられる文字が「今字」である。そして「後世ニテモ、散文ニ書ケバ、古ノ法ナルユヘニ、コレヲ古文ト云」とあるように「古文」は『操觚字訣』における「現在」にまで生きている文体なのである。文体にはその文体をささえる句

法・字法がある。『操觚字訣』において「古字」は、「古文」の形式にのっとってつづられる文章であればたとえ現代においても使われうる、使われなければならない文字なのである。そのために『操觚字訣』がもとめたのは、それぞれの文体が生きた「時代ノナラハシ」である。

「古今」とおなじく文体にかかわるものに「正俗」がある。

「俗字」もやはり「俗」の文章を採用すべきであると認められた場合には、その文体の字法に従って用いられる。このように文体をえらぶのは、字義を弁別することとおなじく書き手の思想が正しく伝わるためである。「日本ニテ國字鈔ヲ源氏物語ノヤウニカキ、消息ヲ宣命ノコトクニ書テハ、世ニ通セザルカコトシ、ソノ別ヲ弁ゼズンハアルベカラズ」(巻一 三ウ)とあるとおりである。このようにそれぞれの時代や文体を尊重しようとする思想は『操觚字訣』の特徴のひとつであるといつてよいだろう。

嗚呼ノ歎辭ハ、(中略) ⑭ 古今ヒロク用ユル字ナリ、字典云、今經史於戲於康嗚呼嗚呼於乎相通、皆歎辭ト、コレ等ハ古字ナリ、ソノ内、於戲ハ、後世ノ習ニテ、ハレノ片ホメル辭ニ用ルナリ、(卷二 二ウ)

易ニナシノ字、ミナ无ニ作ル、甚古字ナリ、亡ハ、(中略) ⑮ 無ノ古字ナリ、(中略) ⑯ 没ヲナシトヨムハ、没減ノ義ヨリオコルナルベシ、後世ノ俗語ナリ、詩ニモ用ユ、(卷三 九ウ)

#### ㊦ 2-2 熟用

勤ハ、勤勞勤苦勤学勤行トツクニテシルベシ(中略) ⑰ 勉



⑤⑥ ハ、勉強勉勵ト云ニテ、ソノ義甚明也、(卷五 三ウ)

⑤ 教諭トハカク教督トハカ、ス、譬如トハカク、諭如トカケハ

サトス、(卷七 三十ウ)

⑦ 列岳列辟列位列坐トツバク類ニテ、シルベシ (卷七 三二ウ)

⑤⑥ ⑤⑥ のように熟用の有無をのべる場合もあるし、⑤⑥⑦ のように

熟語をならべる場合もある。さらに最初にあげた「尊尚貴崇上」

の⑧⑩のように熟語どうしを比較することによって字義を弁別する

場合もある。

④ 日本語との関係を知る

雅ハ常トモ訓スル故、ツネカラノ意アリ、(卷三 二五オ)

更ハ、更易ノ義アリ、フルト訓ズルハ歴ニ近シ、アラタメカ

フルト訓ズルユヘニ、カヘテフル意也、(卷八 十八オ)

そのほかこれまでにあげた例文中の③⑫⑭⑮⑯⑰などがここに含

まれる。「よみ」を示すことによって日本語のなかでその「よみ」

がもつ概念を想起し、それをいくつか重ねることによって、シナ

文字の字義に近い概念を再構築することができる。

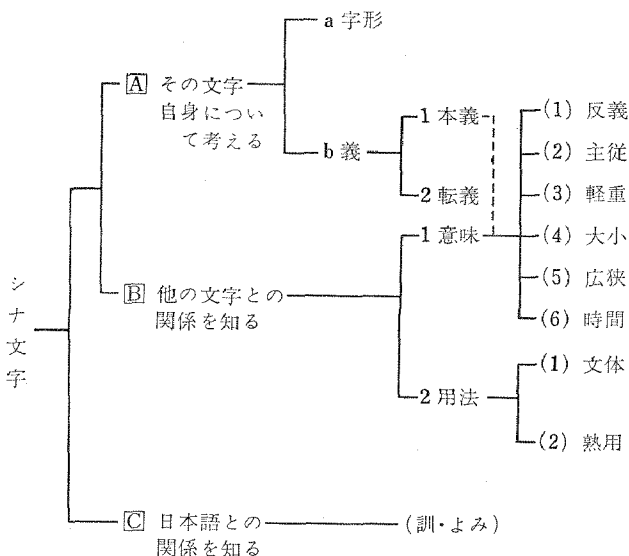
以上、あげてきた字義弁別法を整理して下のような表を得た。

この表は「翻訳辞書」に近い性格をもった『操觚字訣』の註文

から帰納したものであり、筆者としては他の外国語にも応用でき

るのではないかと考えている。その場合には字義弁別は語義弁別

おわりに



以上、『操觚字訣』という文字書の性格を明らかにし、その字

義弁別の方法について考察した。

まず、『操觚字訣』の目的は「臨文」に限られていること、し

たがってこの書が弁別する字義はシナ文字の字義であること、そ

してシナ文字と日本語を表記するための漢字とは区別すべきであることをのべた。シナ文字と漢字とはひとつであるために、かたちも字義も非常に近い。そのためそれぞれがじつはまったくことなる言語体系に属しているのだということを見のがしてしまいがちである。『操觚字訣』という文字書の存在そのものが、漢字によって漢文をつづることはできないと語っているのである。だから『操觚字訣』の註文の記述そのものをもって日本語における漢字を考えることは、この書の目的になくなってはいない。ただ『操觚字訣』がシナ文字のために中国にむかい「時代ノナラハシ」をもとめた姿勢を学ぶことはできる。漢字のためには日本語のなかでの考察を行なわなければならないのである。

つぎに『操觚字訣』の字義弁別法を註文から帰納した。「翻訳辞書」としての『操觚字訣』の性格から、この字義弁別法は外国語の語義弁別に応用できるのではないかと考えた。今回の考察ではシナ文字↓日本語という流れを中心にしたが、字義弁別の方法を考えることは日本語そのものについて考える道標ともなるであろう。たとえばひとつのシナ文字について複数の「よみ」を考えることは、シナ文字の字義に近づくと同時に日本語の語彙体系、意味体系を明らかにすることになる。いずれ論じたいと思っている。

そのほか『操觚字訣』はまだたくさんの問題をかかえているし、時代や社会の側からの考察も必要であろう。これらもあらためて論じたい。

註(1) 『古義堂文庫目錄』をみると『操觚字訣』は「東所書誌

略」中に掲載されている。なお、『操觚字訣』の成立に関しては中村幸彦氏に論考がある。「操觚字訣の成立」『ビブリオ』75 一九八〇 一〇。

(2) 漢語文典叢書第五卷(汲古書院)に影印がある。

(3) 原文の引用について

① 漢字は現行の字体にあらためた。

② 圈点、傍線、読点は原文のままとした。

③ かなづかい、清濁も原文を保存した。

④ 引用文中に付してある番号は筆者の考察のためのものである。

(4) 本文中でのべるとおり『操觚字訣』はすべての時代を尊重する態度をとるから、ここでいう「中国語」は『操觚字訣』の記述の対象となるすべての時代の、より厳密にいえば文章語をさす。

(5) 『譯筌初編』・『詩語解』・『助辭鵠』など、字書類を尊重しない立場もある。

(6) 中村幸彦氏 前掲論文

(7) たとえば釋大典は『詩語解』・『文語解』において字義を明らかにするためにはまず音を知らなければならないと考える。

(8) 『譯筌初編』・『助辭譯通』・『助辭鵠』は「古文」を範とし、『詩語解』は唐詩を範とする。このように「正」とする時代や文体をえらばうとする立場もある。

本稿は卒業論文(昭和五十七年三月)のうち、早大国語学会例会で発表したものを訂正、発展させた。御教示いただいた方々に御礼申しあげる。また成稿にあたり、辻村敏樹先生、杉本つとむ先生に御指導いただいた。ここに記して御礼申しあげる。

(一九八三、八、三十一)